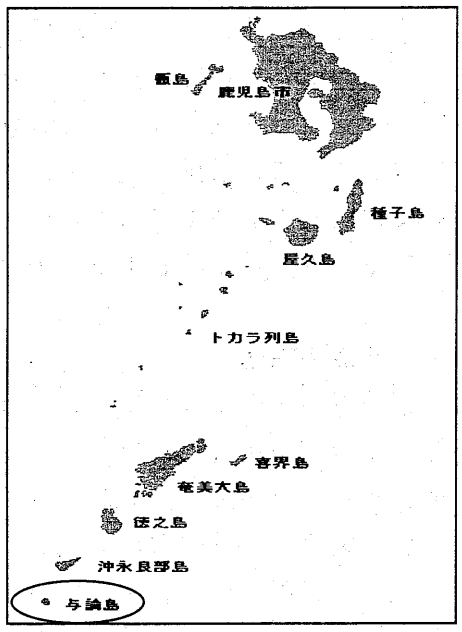
島の海は心の海

離島漁業再生支援事業による島おこし

与論島漁業集落　代表　岩下富孝

1　地域の概要



木の葉みたいな形をしている我がヨロン島は，北緯 27 度 2 分，東経 128 度 25 分にあり，目と鼻の先に沖縄本島の辺戸岬を望む鹿児島県最南端の島である。

鹿児島市から南へ 592km，沖縄県那覇市からは 141km にあり，人口 5,823 人，周囲 23.65km，面積 20.49km^2 のハイビスカスの花と珊瑚礁に囲まれた美しい島である。与論と言えば観光地とイメージされる方も多いが，主な産業は農業・漁業・観光業である。

是非一度，与論島に足を運んで与論の自然・伝統・文化を見てください。皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

2　漁業の概要

与論町漁協は，与論町の中心地茶花にあり，毎朝８時から活気のある競りが行われている。

漁協組合員数	正組合員 84 名	准組合員　198 名	計 282 名	（H18.3.31 現在）
総水揚げ金額　222 百万円		島内売上 61 百万円	島外出荷　160 百万円 （沖縄 50%　鹿児島 50%）	

魚種別	ソデイカ	９５百万円	（４３%）
	シビ・マグロ	３６百万円	（１６%）
	瀬物	３３百万円	（１５%）
	タチウオ	１２百万円	（　５%）

（平成１７年４月～１８年３月実績）

3　離島漁業再生支援事業とは

この事業は，水産庁の事業で，離島の漁業を元気にして，水産業と漁村の果たしている役割や機能の維持・増大を目指して平成 17 年度から５カ年事業としてスタートした。

事業は，集落協定を締結した漁業集落が実施している。この漁業集落は，行政的な字（あざ）や校区とは異なり，漁業の実態に合わせて，複数の字（あざ）を組み合わせることもできる。与論では漁業の実態や漁獲物が１つの市場に集まることを考え，島全体を１つの漁業集落としている。

与論島漁業集落は構成員 137 人で，年間約 1,800 万円が交付されることとなっている。

なお，この事業の良い所は，どのような活動を行うかを話し合いにより自分たちで決めることができることや，事業が終わる平成 21 年度までは前年度の予算を翌年に繰り越すことが可能なこと，さらに漁協や漁業者の負担がないことなどである。

4 漁業を始めたきっかけと漁業集落の代表に選ばれた経緯

この事業は、国が平成 17 年度から開始しましたが、与論では町の予算措置や漁協の実施体制が整わなかったため、平成 18 年度から取り組むことになっていた。

ところが 17 年 6 月にあった漁協総会で、県の大島支庁から事業内容の説明があり、それを聞いて、町長、町議会議長や漁協執行部が、「折角のすばらしい事業だから少しでも早く導入しよう」ということで考えが一致した。そこで町が補正予算を組み，急遽 17 年度から取り組むことになった。

それからあわてて準備を始めたが、まず代表者を決めなければ事業は進まない。漁協組合長から直々に依頼を受け、本格的に漁業を始めてからまだ 3 年目の私が、若輩ながら引き受ける事になった。

5 実際の活動について

5－1 全体会と部会

私が代表者に任命され，活動を実際に始めたのは，平成 17 年 10 月からである。

活動当初は何をどのようにしてよいのか分からなかった。まずは集落の全構成員にこの事業の主旨を伝え，今後の活動計画を考えるために全体会を開催しなければならなかった。

最初の全体会では，いろいろなアイディアが出されたものの，構成員が多いため，意見がまとまらなかった。

新しい事業ということもあって，漁協，役場に聞いても分からないことがあり，潜水漁業を営んでいる私も，海に出る時間がない状態が続きました。悪いことにそのころ漁協組合長が体調を崩し，不在の状態になったため，事業がストップしそうになった。

そこで，手始めに，一番目的が分かりやすく，実行し易いことから海岸清掃を全体で行うことを決め，さらに漁業種類ごとに部会を設置し，１度各部会で検討してから全体会で承認する体制にしたところ，ようやく事業がスムースに動きだした。

全体会実績	H17 年度　2 回	H18 年度（11 月まで）2 回
全　体　会	活　動　内　容	
	海岸清掃，海底清掃，藻場造成，植樹，密漁監視，不審船監視	

部　会	活　動　内　容
素もぐり部会	イカシバ投入
一本釣り部会	ソデイカ釣具の改良
加工部会（H18～）	新規加工品の開発と試食販売
養殖部会	オキナワモズク養殖の先進地視察 新規参入者の掘り起こしと技術指導
網部会	休業中の追い込み網の復活 若手漁業者への技術指導 観光，地域教育への利用方法の検討
パヤオ（浮魚礁）部会	検討中

5—2 海岸・海底清掃

海岸清掃を初めて行ったときは，日当が支払われるという情報が先行し，漁業集落の構成員の家族までが多数参加してきたので，大変なパニックになってしまった。これでは予算を超過し，他の事業に影響が出かねなかった。協議の結果，各世帯へは１人分の日当しか支払わないことにし，予算内で事業を実施できるようになった。

海底清掃については，初年度は素潜りで行ったが，今年度からは海洋レジャーとの共存ということで，ダイビング案内をしている業者と共に素潜りではできないリーフの沖，水深 10～20m の清掃を実施した。

この清掃には，若くてかわいい女性ダイバーが参加したので，漁業者の参加希望が殺到し，調整に苦労した。

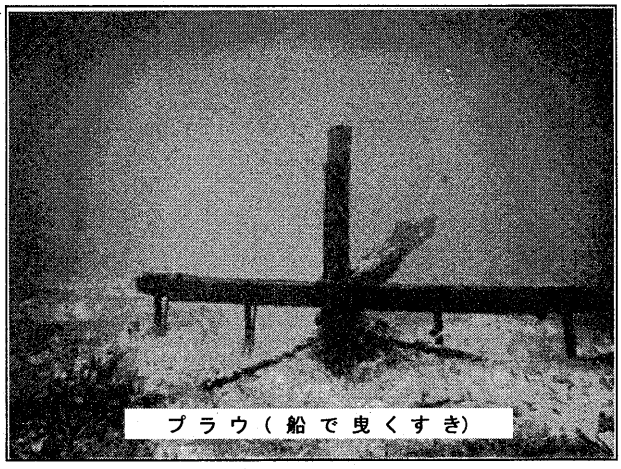
海岸清掃・海底清掃を通して私が感じたことは，ずっと美しい島だと思っていたのが，見かけでは気づかないだけで，実はゴミの多い島だということだった。これからも自然を保護し，きれいな島を維持するためにもこの活動は随時やっていく必要があると思う。

海岸・海底清掃実績	H17 年度	H18 年度（11 月まで）
海岸清掃	３回	３回（世帯員２回，高校生１回）
素潜りでの海底清掃	４回	５回
レジャーとの共同	－	４回

5—3 藻 場 造 成

近年原因は分からないが，浅瀬の海藻類が非常に少なくなっている。海藻復活のために次の２通りの方法を試みた。

一つ目は，オゴノリ類の増殖である。与論では南方系のオゴノリであるユミガタオゴノリが生育し，これはスーナと呼ばれ，市場では生で 1,000 円/kg と高価で取引されている。さっと湯通しして酢味噌で食べると，こりこりとした食感があり，磯の香りもあって大変おいしい物である。このスーナは礁湖内の砂地の死んだサンゴのかけらに付着して生育する。砂に埋もれているサンゴ片を掘り出せば，スーナが生えてくるのではないかという考えから，プラウを作り，漁船で引っ張り海底耕うんを行った。その結果，埋まっていたサンゴ片が砂の上に現れ，スーナが生育しやすい状況を作ることができた。


プラウ（船で曳くすき）

しかし，この方法では海が時化るとまた元のようにサンゴ片が砂に埋もれてしまうことがあり，１年目には思った通りの成果は出なかった。

ただ，これまで航路の浚渫などが行われると，その周辺で２～３年後にスーナを大漁することがあったので，今後に期待したいと思う。

次にオキナワモズクを中心とした藻場造成のため，海底に基質を設置した。基質としては自然石をかごの中に入れたものと，テトロン網を使用した。

平成 17 年３月に，モズクの種が付着したフィルムとともに基質を設置したが，５月にはどちらの基質にも，モズクがいっぱい生育した。さらに網やかごの周辺には稚魚や稚ウニ，たこ，エビ等が多数生息しているのが確認出来，大きな成果があった。ただ，テトロン網による方法では，網の一部が砂に埋もれ，そこではモズクは育たなかった。

また，今回はほとんどのかごや網を台風時期の前に撤去したが，一部残していた網から，モズクが枯れた後に，アオサなどが成育してきた。

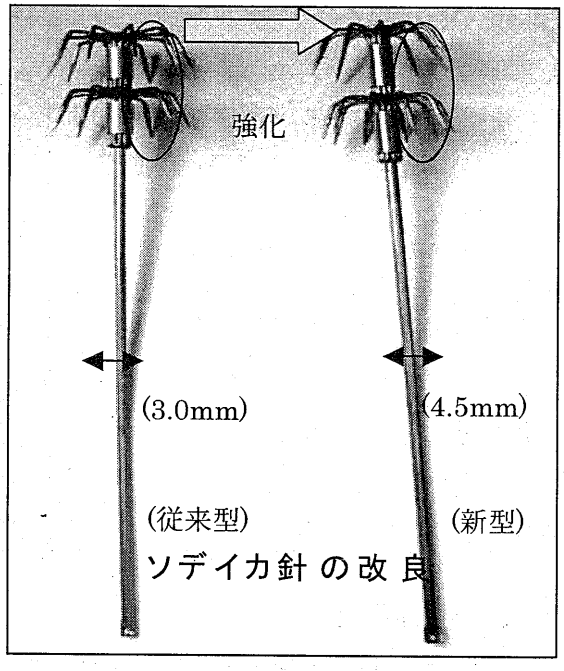
このように設置場所や設置方法，施設撤去の時期等，検討すべき課題も残ったが，比較的簡単な方法で短期間にモズク藻場を作れることがわかったので，これからも続けて行きたいと考えている。

藻場造成実績	H17 年度実績	H18 年度（11 月まで）
海底耕耘	１回	１回
基質設置	１回	３回（追跡調査）

5—4 漁具の改良

与論の漁業で大きな割合を占めているのが，ソデイカ漁だ。漁法は主に旗流し釣りで，漁場は与論近海から大東島の北方海域まで，時期によって移動する。ソデイカは外洋性の大型のイカで，１パイが７～１５kg ほどに成長する。

そのため，通常のイカ針ではすぐに伸びてしまうため，大型で強度が強いソデイカ針というのが市販されている。しかし，このソデイカ針でも伸びてしまうことがあるので，一本釣部会では釣具メーカーに，より硬いタイプの針の製造を依頼した。



ソデイカ漁業者にこの新型の針を１人 10 本ずつ配布して，従来のタイプと比較してもらった。配布直後に実施したアンケートでは，新型と従来型の針での漁獲等に，ある程度の差はあったものの，それほど大きな差はなかった。しかし，従来のタイプが一本４４０円なのに対し，新型が６００円とやや高価であるにもかかわらず，次第に新型の針を使う漁業者が増えてきている。これは，かかったイカがバレにくいことや，針の持ちがよいなどの新型の良い点が徐々に浸透してきたためと考えている。

また，同時に水中ライトに使う豆電球を，通常タイプと青色発光ダイオードで比較した。通常タイプが，１球７０円なのに対し，発光ダイオードは２００円と高価だが，電球の持ちが良く，電池の消費も少ない事から，アンケートでも発光ダイオードは好評で，いまでは多くの漁業者が発光ダイオードの電球を使っている。

青色発光ダイオード（LED）	ダイオードの寿命は連続使用で約１ヵ月
従来型の豆電球	豆電球の電池寿命は連続使用で２～３日

漁具の改良を釣具メーカーに依頼することは個人ではなかなかできないが，今回，一本釣り部会の話し合いの中で，ソデイカ針に不満を持つ漁業者が少なくないことが分かり，だめで元々と大手釣具メーカーに改良を依頼した。偶然，沖縄からも同様の依頼があったようで，メーカーとしても採算に合いそうだと針の改良を引き受けてくれた。

この事業がきっかけとなって，１つの成果を挙げることができたと感じている。

5—5 水産物加工，販路拡大

離島の漁業で一番大変な事は，漁獲物をいかに高く販売するかだ。与論町漁協では加工場を運営している。しかしながら，漁獲量の少ない魚種の加工にまではなかなか手が回らない。そのため，加工部では新しい加工品の試作と試食販売等を実施している。

これまでシビのつみれや魚味噌，マグロコロッケ，ナマコの韓国風ピリ辛炒めなどに挑戦した。ほとんどがおいしく出来て評判はよかったものの，いまだ試行錯誤を繰り返している。

この事業によって１つでも多くの新製品ができればと頑張っている。

これまでに作った試作品	課題点等
ハリセンボンの鍋セット	沖縄での試食は好評。今後，凍結方法を検討
シビの魚味噌	イベントでの販売は好評だったが，改良の余地あり
シビのつみれ	好評につき商品化しているが，食感の改善がまだ必要である。
マガキガイ（ティダラ）の串	沖縄での試食販売は好評だったが採算に難。
マグロ（シビ）コロッケ	商品化を検討中
ジャノメナマコのチャンジャ（韓国風ピリ辛炒め）	大変おいしくできたが，保存法が課題 真空パック等を検討したい
モズク佃煮	漁協加工場より良い製品ができなかった。
トビウオミンチ	漁協加工場より良い製品ができなかった。

5—6 植 樹

与論は南国特有の赤土流出に悩まされている。以前と比べ，土木工事等からの赤土流出は減少しているものの，さとうきび畑など，農地からの流出はまだまだある。そのため，１世帯当り，苗木100本の割当で希望者を募り，赤土の流出を防ぐため畑の縁やあぜに植樹して貰った。

植樹実績	H17年度実績
モクマオウ，クロキ，フクギ，マサキ等	42人　4,057本

5—7 密漁監視，不審船監視

この事業は奄美沖で銃撃事件があった北朝鮮の不審船問題から，国境監視について，離島の漁業者にも一定の役割を与えるために当初計画されたと聞いている。戦後，沖縄が返還されるまで 27 度線にある与論は国境の島であった為，私自身も子供の頃は「沖縄を返せ～沖縄を返せ～」と歌いながら歩いていたのを思い出す。

そのため，密漁監視と合わせて，不審船情報を集めるため，漁に出た際に漁場監視日報を提出して貰っている。中には潜水艦を見たなどの報告書もあり，これからも随時やっていかなければならないと思う。日常の漁労作業で手一杯のため，なかなか監視報告が集まらないこともあるが，全体会を通じて強く推し進めているところである。

また，島内ではみんな身内や顔見知りばかりなので，密漁について強く注意しにくい現状がある。そこで密漁監視隊Tシャツを作り，日常でも着て歩いている。Tシャツを着ている時は，一般の方々が我々を見る目がだんだん変わってきたように感じる。

密漁，不審船監視実績	H17 年度実績	H18 年度（11 月まで）
漁場監視日報	229 件	124 件
監視 T シャツ	0 枚	274 枚

6 まとめ

最後に私たちの漁業集落が離島再生の為に船出するのに際し，船体・機関の整備・点検をして頂いた組合役職員の方々，また日夜摸合い網を携えていてくださいました町行政の皆様，そして波穏やかな大海原を用意し，導いてくださいました国・県の方々の御発案と御支援に，衰心より厚く御礼申し上げます。

この事業のおかげで，様々な話し合いが活発に行われ，良いアイディアがどんどん出てきます。そして最近も，イセエビ畜養水槽をみんなで作ったり，密漁防止のための看板を立てたりと，アイディアがどんどん実現され，浜が活気づいてきました。

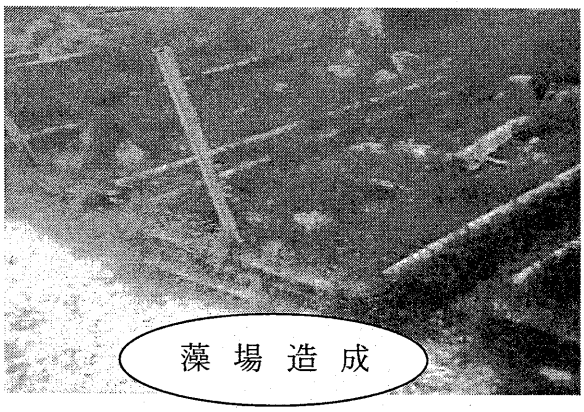
事業が始まるきっかけとなった奄美の海で漁をする者として，期待に応えられるよう，これからも頑張っていきたいと思います。

青い空，碧い海，島の海は僕の心の海です。

ミッシークトオトゥガナシ。誠に有難うございます。

各　活　動　の　様　子

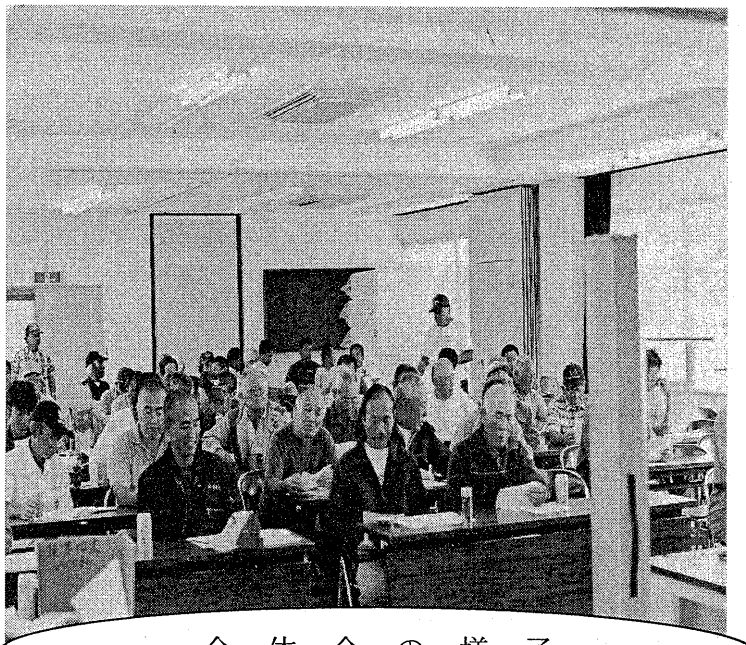
海底清掃



藻場造成

植樹苗木

密漁監視Tシャツ



全体会の様子

海岸清掃

加工品試作